



“炎のマエストロ” 小林研一郎の魅力

平林直哉

小林研一郎 ©読響

作品の生命を 客席に熱く届ける

“炎のコバケン”。誰からともなく小林研一郎に与えられたこの愛称。彼がこう呼ばれるようになったのはいつ頃からだろうか、ふと考えてみた。小林が注目を浴びたのは1974年、ブダペスト国際指揮者コンクールで優勝した時だった。その後、小林は国内外で幅広く活躍することになるのだが、この頃はまだ特に愛称のようなものはなかったように思う。それに、半ば優勝のお祝いとしてLP発売されたストラヴィンスキーの〈春の祭典〉、R.シュトラウスの〈ドン・ファン〉や〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉などは、炎というよりは知的で落ち着

いた印象を与えるものだった。しかし、1982年に発売されたチャイコフスキーの交響曲第5番のLPには、「渦巻く音のドラマ、白熱のチャイコフスキー」と記されているのを見ると、1980年代に入った頃あたりから、「小林は、ライブで本領を発揮する指揮者」のように認識され始めていたようである。

音楽に限らず、多くの人は静的なものよりは動的なもの、冷たいものよりも熱いものを好む傾向にある。ことに演奏会のように一回限りのものであれば、そうした欲求はますます高まるばかりだ。けれども、本番に次ぐ本番といったプロのオーケストラを相手に、毎度のように炎と化するのとはとても難しいことである。だが、小林は炎、言い換えれば作品の生命を客席の人々に

届けるために努力を惜しまなかった。彼にとって、自分が燃え、オーケストラを燃え立たせなければ、音楽は単なる干物であり、無機質な音の連なりなのだ。

小林の指揮は、誰よりもエネルギッシュだ。指揮台を所狭しと動き回るのは、師・山田一雄譲りであろう。髪を振り乱し、かっと目を見開き、オーケストラから最大限の音を引き出そうとする。ある楽団のメンバーは、「ふと見上げたら小林の顔が悪魔のように見え、それまで出したことのなかった音が出た」と言っていた。一方では撫でるような、ため息のような音を要求する時の小林もまた、一流の舞台俳優のような仕草できっちりリードする。時に両手を大きく広げ、微動だにせず、しばしオーケストラに任せることもある。あるいは、客席の方を指さし、もっと音を遠くに飛ばせと言わんばかりの仕草もまた、小林独特のものである。

終演後も彼は独特のスタイルを持っている。律義に全員を立たせ、自分から各奏者に歩み寄り、握手をし、その労をねぎらう。以前は、そこまでやる必要があるのかと思っていた人もいたが、今ではこれがないとコバケンの演奏会に来た気がしないのが不思議である。カーテンコールで小走りに出てくるのもまた、コバケン名物かもしれない。拍手を制し、足を運んでくれたお



小林の師・山田一雄

客さんはもとより、スポンサーなどへの感謝の言葉を述べるのも小林流である。

かくして、コバケン・ファンは、演奏内容はむろんのこと、独特の仕草やおしゃべりなど、すべてをセットにして楽しんでいるのである。こんな指揮者は、他に類例がない。

小林×読響 〈我が祖国〉の名演

さて、小林研一郎と読売日本交響楽団との演奏だが、さきほども少し触れたように、小林は単に技術的に優れているだけの団体ではうまくいかないようである。指揮者が楽員に向かってボールを投げ、それを投げ返すような心意気がなければならない。別の言い方をすれば、指揮棒に食らいつく気迫が望まれるのだ。その点、読響はカンブルラン、スクロヴァチェフスキ、ロジ

エストヴェンスキーらの演奏でも、それを実証済みである。

小林と読響の、ある意味で象徴的な演奏は、2013年4月22日に行われたスメタナの〈我が祖国〉全曲だろう。この日のライヴは演奏会終了後、1か月後にはCDが店頭に並ぶという異例の事態だった。2002年5月、プラハの春音楽祭で東洋人として初めてこの〈我が祖国〉を振ったのが小林だったのは、多くの人の知るところである。

〈我が祖国〉は言うまでもなく、国家の存亡をかけた闘いが描かれている。しかも作曲当時、スメタナは聴覚を失い、絶望のどん底にいた。けれども、彼は愛する母国のために、それこそ死力を尽くして完成したのである。全曲を演奏して初めてその全体像が明らかになる、とても深い内容の作品なのだ。それを熟知した小林が、この読響との出会いで、スメタナの魂が舞い降りてきたような、異例とも思われる



2013年2月24日、ロンドン・フィルとチャイコフスキー／交響曲第5番の録音セッション。ロンドン、アビーロード第1スタジオにて。左はプロデューサーの江崎氏。(写真提供：筆者)

燃え上がりを見せたのがこの時の〈我が祖国〉だった。これがあるから、小林の演奏会は聴き逃せないのだ。

ブラームス交響曲全集の録音セッション

小林と読響は2014年からブラームスの交響曲全集の録音を開始、第1番と第3番がすでに発売されている。これは〈我が祖国〉とは異なり、無人のホールでの録音セッションである。炎の指揮者が聴衆不在のホールでの収録を始めたのは意外だが、これは2013年と14年にかけてロンドンのアビーロード・スタジオで行ったロンドン・フィルとのチャイコフスキー・ツィクルスに起因しているかもしれない。言うならば小林自身が、その場でやり直しのきく録音セッションの利点を感じたのであろう。

私はたまたま2013年のセッションに立ち会うことができた。セッションが始まって最初の休憩時間、小林は満面の笑みをたたえていた。しかし、セッションを重ねて行くに従い、指揮者とオーケストラの着地点がずれ始めた。すると、指揮者の顔には苦悩がにじみ始める。袋小路に入り込み、うつむいて無言となったり、中空を見つめてぼんやりしたりすることさえあった。小林のような百戦錬磨の指揮者で

さえも、生みの苦しみがどれほど大きなものなのか、立ち会っていた私たちにも痛いほど伝わって来た。

試行錯誤のあと、闇のような暗さの中にひと筋の光明が差し、そこから次第に問題点が克服された。やがて指揮者は目標を達成し、調整室は明るい空気に包まれた。その時

の小林の安堵感と幸福そうな表情もまた、忘れがたいものだった。

話を戻すと、最終的な音質ということ考虑すれば、このブラームスのようなセッションが理想的である。2曲のブラームスをひとことで言うと、上質な響きと熱っぽさが巧くバランスを保っているのではないだろうか。それに、力まなくても、それほど汗をかかずとも、オーケストラから最上の響きを引き出せるほど小林の棒は円熟期に達しているのだ。ついでに言えば、第1番の余白にあるハンガリー舞曲集(抜粋)、第3番と組み合わせられたシューベルトの〈未完成〉交響曲も聴きごたえ十分だ。残る第2番、第4番の完成が待ち遠しい。

誰もが音楽を楽しむ 共生するオーケストラ

コバケンといえば、2005年から始



2012年7月の「コバケンとその仲間たちオーケストラ」横浜公演より
©久田方彦

まったプロジェクト、「コバケンとその仲間たちオーケストラ」にも触れねばなるまい。小林はある日、楽屋を訪れた障がい者と面会した。演奏を聴いた感激を伝えたくても上手に伝えられない、そんな人を見て、彼はこのオーケストラを思いついたという。彼は障がい者を客席に招くだけでなく、障がいのあるメンバーも積極的に起用したのだ。誰だって音楽を聴き、楽しむ権利はあるのだ、というのが小林の基本的な考えなのである。運営はもとより、リハーサルも困難を極めるだろうこの企画を、多忙の合間に継続しているのには、まったく頭が下がる思いだ。

コバケンの“炎”とは、単に舞台上で指揮者とオーケストラが燃え上がるだけではなく、音楽を通じて多くの人に喜びを与え続ける、そのエネルギーを生み出し続ける“炎”なのであろう。

(ひらばやし なおや・音楽評論家)

心に残るクラシック

篠田節子 — ③

Setsuko Shinoda

名曲喫茶で見た白昼夢

レスピーギ：リュートのための古風な舞曲とアリア



歩くとぎしぎしいう店内には、たばこと湿った床板とワックス、それに煮詰まったコーヒーの入り混じった臭気が漂っていた。埃の溜まった電灯の下には、微熱を帯びたような人工の夜が張りめぐらされ、客たちの話し声を圧して、巨大な箱形スピーカーから管弦楽の音が流れてくる。

針音とともに新たな曲がかかるたびに、店員がLP盤のジャケットを台の上に立てかけ、曲名と演奏者名を黒板に書き付けていく。

コンサートホールに行くのは年に二、三回の祭りのようなものであるし、歌謡曲をかけながら家の手伝いや勉強をしているならともかくとして、女の子が一人、一時間もステレオの前に座っていたら、お嬢様ならともかく庶民の家では母親に帯ではたかれる。

そんな環境に育ったから、知らない曲との出会いは、FMラジオかボーイフレンドの部屋以外は、都内にいくつ

かあった名曲喫茶に限られていた。

マーラーの〈復活〉やハイドンの〈十字架上のキリストの最後の七つの言葉〉(管弦楽版)、ワーグナーの〈パルジファル〉などはそうした店で知った。

当時の若者文化がそうだったのかもしれないし、不健康で怪しげな空間のせいかもしれない。とにかく重厚長大で辛気くさい曲ばかりがかかっていたような気がする。

そんな折、不意に軽やかで優美な旋律が流れてきて、はっとした。

どちらの客がリクエストしたものか、黒板には〈リュートのための古風な舞曲とアリア〉と曲名が書かれていた。

リュートって、あのヴァイスやダウランドの？ だがその弦楽オーケストラの演奏に、あの撥弦楽器の音はなく、和声は近代のものだ。軽やかで素朴な音楽は次第に厚みを増し、様々な表情を見せ始め、やがて劇的で重厚な三拍



オットリーノ・レスピーギ (1934年撮影)

子で締めくくられる。短調の曲なのに不思議と明るく澄み切っている。薄暗い店内に立ちこめるたばこの煙や淀んだ呼気をその音が吹き払っていった。

作曲家のレスピーギは、ラヴェルやバルトークと同時代の人だとその後知った。二十世紀に入ると、一般的に調性が複雑になってきて私のような素人にとってはなんとなく敷居が高くなるのだが、この曲はあまりにも親しみ易い。

しばらくして代表作とされるローマ三部作を聴く機会があったのだが、そちらの方は、ローマというよりイタリアのナショナリズムの高揚を感じさせる、賑々しく近代っぽい音楽で、〈リュートのための……〉とはずいぶん違うな、という印象を持った。そしてこ

れがレスピーギの本領で、作曲技法さえ身につけていれば、ルネサンス、バロック風の旋律を創作し、古風なムードのきれいな曲を作るのは容易いことなのだろうと、勝手に納得したのだが……。

そうではなかった。

生演奏でこの曲を聴いたのは、名曲喫茶の薄灯りの下で出会ってから十年あまり後のことになるが、プログラムによれば、〈リュートのための古風な舞曲とアリア〉は、レスピーギが教授を務めていたサンタ・チェチーリア音楽院の図書館で、19世紀に編纂さ

れたルネサンス、バロック期のリュート作品集から彼が選り出し編曲したものだった。

この日の演奏曲目はバッハ、レスピーギ、それからバルトークの順だったように記憶している。

あらためて聴くとバロックと近代音楽の合間で、レスピーギの曲は不思議な光輝を放っていた。古い時代の作曲家、無名のリュート弾き、宮廷音楽家たちが、現代楽器の音色の背後に顔を出す。繁栄を極める石畳の町や黄昏期を迎えた都市国家の光景が紛れもない近代音楽の背後に立ち現れてくる。思いの外大きな時空の広がりを感じながら、幸福な白昼夢を見た。

◎チューバ奏者

次田心平

Shimpei Tsugita

土台どっしり
厚みのあるサウンド作ります

《オーケストラで最大の金管楽器チューバ。プログラムによってはステージに乗らないこともありますね》

そうなんです。チューバは、モーツァルト、ベートーヴェンではまったく登場しないし、ブラームスも交響曲では2番にしかない。それ以降の時代の作曲家、たとえばチャイコフスキーにはよく登場します。12月2、3日のプログラムの交響曲第4番は何度も演奏しました。マーラーでも活躍するし、

プロコフィエフの交響曲第5番なんかは一番楽しいと感じます。

《ずいぶん重たそうな楽器です》

大きいけど中は空洞だから軽い。実は、チューバの形は決まっていなくて、大きさはさまざまです。僕は10本持っていて、部屋はチューバだらけですが(笑)。軽快な曲の時は小ぶりのチューバを使うなど、曲に合わせます。イタリアの曲では、「チンバッソ」(写真右)に持ち替えることもあります。ベルが折れ曲がって前を向いています。歌劇場の狭いオーケストラピットの中で演奏するにはこのほうがアンサンブルにはいいと、オペラの盛んなイタリアで生まれた楽器です。

《次田さんは京都出身。チューバを始



めたのは中学校の部活、京都市立音楽高を経て京都市立芸大へ》

兄二人が吹奏楽部で、ホルンとユーフォニアムをやっていたので、僕も当然のように入部しました。最初に男子だけ集められ、じゃんけんで楽器を決めることに。僕は1回目で負けてチューバに決定！(笑)。思い出すのは指揮者の佐渡裕さんが同じ高校・大学出身で、年に一度高校に授業をしに来てくれたことです。大学1年の時の定期演奏会も佐渡さんの指揮でしたが、ベートーヴェンの〈第九〉で、僕の番はなし。それを気にした佐渡さんはわざわざアンコールでチューバのある曲を選んでくれたのです。でも、4年生の先輩がいたので結局出られなかった。残念でしたが、僕を気遣ってくれたのが嬉しかったです。

恩師としては、高校時代から親身に育ててもらった京都市交響楽団の武貞茂夫先生。大学ではトロンボーンでカリスマ的存在だった呉信一先生。オーケストラの基本を学び、コンクール前には随分面倒を見てもらいました。呉先生は僕の大学だけでなく、関西の金管奏者みんなが注目し、慕っていました。その影響は絶大だと思います。今は東京音大におられます。

《2003年に日本フィルハーモニー交響楽団に入団、第24回日本管打楽器コンクールで1位を獲得。その後

オーディションを経て08年に読響の団員に。読響に入ってどう感じましたか》

凄くいいオーケストラだと思いました。最初はここでやっていけるかと思うぐらい、周りがとても上手かった。好きなのはプログラムで大きい曲が多いところ。チューバ奏者としてはすごく幸せですね。読響に入団後、ヴォーン＝ウィリアムズやカレヴィ・アホのチューバ協奏曲(日本初演)を演奏しました。まだそんなに慣れていない頃だっただけに、ものすごく大変な思いをしました。

読響の活動以外には、ポルトガルのチューバ奏者セルジオ・カロリーノさんとチューバ2本の演奏会を定期的で開催しています。曲はオリジナルのものばかり。読響でもいつかチューバ2本の協奏曲をやりたいですね。

《最後にチューバの難しさと魅力は》

音域が3オクターブ以上もあって難しい。ただ、基本的に一人パートですから、ここはコントラバスに寄せようとか、ここはヴァイオリンを意識しようとか、思うように演奏できるのは楽しさの一つです。チューバの役割はオーケストラの土台で、どっしりしていると音程の高い楽器が乗りやすい。メロディーとともに、音が厚くなっている時の心地よさ、厚みのあるサウンドも楽しんでいただけたらと思います。

カエターニが振るロシア音楽。鬼才ポゴレリッチが注目の共演！

12/13(火) 19:00 第565回 定期演奏会
サントリーホール

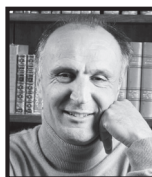
ムソルグスキー (ショスタコーヴィチ編)：歌劇〈ホヴァンシチナ〉から
“ペルシャの女奴隷たちの踊り”

ボロディン：交響曲 第2番

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番

指揮：オレグ・カエターニ

ピアノ：イーヴォ・ポゴレリッチ



オレグ・カエターニ



イーヴォ・ポゴレリッチ

ドイツの名匠シュテンツが〈第九〉を指揮。年末に響く“歓喜の歌”

12/17(土) 14:00 第193回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/18(日) 14:00 第92回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

12/20(火) 19:00 FUJITSU Presents Concert
〈第九〉特別演奏会 サントリーホール

12/21(水) 19:00 第599回 名曲シリーズ
サントリーホール

12/22(木) 19:00 第15回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール(大阪)

12/25(日) 14:00 第193回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/26(月) 19:00 〈第九〉特別演奏会
東京オペラシティコンサートホール

ベートーヴェン：交響曲 第9番〈合唱付き〉

※12月20日公演はベートーヴェンの〈エグモント〉序曲も演奏します。

指揮：マルクス・シュテンツ

ソプラノ：アガ・ミコライ

メゾ・ソプラノ：清水華澄

テノール：デイヴィッド・バット・フィリップ

バス：妻屋秀和

合唱：新国立劇場合唱団

合唱指揮：三澤洋史



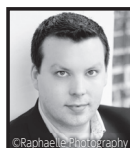
マルクス・シュテンツ



アガ・ミコライ



清水華澄



デイヴィッド・バット・フィリップ



妻屋秀和

12月 公演の聴きどころ

13日の《定期演奏会》では、セルビア出身のピアノの鬼才ポゴレリッチが、読響と約21年ぶりに共演し、人気のラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を取り上げる。1980年のショパン・コンクール以来、その独創的で異端ともいえる演奏は常に注目を浴びてきた。単独でのリサイタルは定期的には開かれていないが、日本で協奏曲を聴けるチャンスは稀有。誰もが知る名曲をどう料理するのか、期待が高まる。指揮は巨匠マルケヴィッチを父に持つ名匠カエターニ。コンサート前半は、得意のロシアものからボロディンの交響曲第2番などで実力を見せる。

12月後半には、年末恒例のベートーヴェン〈第九〉公演を、12月17日から26日までに計7公演、開催する。今年の指揮は、ケルン市音楽監督として長く活躍し、ベルリン・フィルやミュンヘン・フィル、ウィーン響との関係も深いドイツの名匠シュテンツ。すっきりとした様式感と、数々のオペラで鍛えられた巧みな声楽の扱いで、おなじみの〈第九〉を新鮮に聴かせるだろう。

声楽陣には世界で活躍する実力派が集まる。ソプラノは、2014年の〈第九〉以来、2年ぶりの登場となるミコライ。バイエルン国立歌劇場、パリ・オペラ座、ウィーン国立歌劇場などヨーロッパの主要な歌劇場で活躍し、高い評価を得ている。今月にはシュテンツの指揮でロイヤル・コンサートヘボウ管とも共演する予定だ。メゾ・ソプラノは昨年に続き、近年の活躍が目覚ましい清水華澄。今年も圧倒的な歌唱力を聴かせてくれるだろう。テノールのバット・フィリップは、英国ロイヤル・オペラなどで活躍する期待の若手で、今回が初来日となる。バスは、日本人離れした堂々たる風格と深みのある美声が特徴の妻屋秀和。ライブツィヒ歌劇場やワイマールのドイツ国民劇場など、ドイツでの実績も豊富な名手だ。

合唱には日本が誇るプロ団体の新国立劇場合唱団を迎え、“歓喜の歌”を力強く響かせる。年の瀬の日本を彩る風物詩〈第九〉にふさわしい手応えと感動をお届けする。

(文責：事務局)

読響チケットWEB

検索

カンブルランが、よみうり大手町ホールに初登場！

1/20 (金) 19:30 第13回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《カンブルラン指揮の小編成オーケストラ》

ロッシーニ：歌劇〈セビリアの理髪師〉序曲

ウェーバー：クラリネット協奏曲 第2番

モーツァルト：交響曲 第40番

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

クラリネット：藤井洋子（読響首席）



シルヴァン・カンブルラン



藤井洋子

シリーズ600回目を記念する《フランス音楽の精華》

1/25 (水) 19:00 第600回 名曲シリーズ
サントリーホール

デュカス：舞踊詩〈ラ・ペリ〉

ドビュッシー：夜想曲

ショーンソン：交響曲

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

女声合唱：新国立劇場合唱団



シルヴァン・カンブルラン

約130人の超巨大編成による傑作を、遂に読響で！

1/31 (火) 19:00 第566回 定期演奏会
サントリーホール

メシアン：彼方の閃光

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）



シルヴァン・カンブルラン

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター **0570-00-4390**

(10:00～18:00／年中無休)

ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

チャイコフスキーの名曲で、カンブルランのタクトが冴える！

2/4 (土) 14:00 第194回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

2/5 (日) 14:00 第194回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲

チャイコフスキー：交響曲 第5番

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

ヴァイオリン：シモーネ・ラムスマ



シルヴァン・カンブルラン



シモーネ・ラムスマ

4623本の巨大パイプオルガンと管弦楽による華麗な響き

2/11 (土) 14:00 第93回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ドビュッシー：小組曲

サン＝サーンス：チェロ協奏曲 第1番

サン＝サーンス：交響曲 第3番〈オルガン付き〉

指揮：小林研一郎（特別客演指揮者）

チェロ：宮田 大



小林研一郎



宮田 大



こんなに便利！ 読響チケットWEB

読響チケットWEBは、インターネットから読響のチケットをお求めいただける専用ウェブサイトです。24時間いつでもお申し込みができ、ご自身でお好みの座席をお選びいただけます。

以下のURLもしくは公式ウェブサイトのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

※初回お申し込み時は利用登録（無料）が必要です。

宮崎陽江ヴァイオリン協奏曲の夕べ

■ 11/28 (月) 19:00 東京オペラシティコンサートホール

指揮：大友直人

ヴァイオリン：宮崎陽江

《オール・ベートーヴェン・プログラム》

〈プロメテウスの創造物〉序曲、ヴァイオリン協奏曲、交響曲 第7番

[料金] S ¥6,000 A ¥5,000 B ¥4,000 学生 ¥2,000

[お問い合わせ] コンサートイマジン 03-3235-3777

スターピアくだまつ名曲シリーズⅩⅣ

■ 12/5 (月) 18:30 スターピアくだまつ大ホール

指揮：小林研一郎

ピアノ：松田華音

チャイコフスキー／ピアノ協奏曲 第1番、交響曲 第4番

[料金] S ¥4,800 A ¥4,300 B ¥2,000

[お問い合わせ] スターピアくだまつ 0833-41-6800

福住スペシャルコンサート2016 式守満美&読響 名曲の夕べ

■ 12/6 (火) 19:00 アクロス福岡シンフォニーホール

指揮：小林研一郎

ピアノ：式守満美

ベートーヴェン／ピアノ協奏曲 第5番〈皇帝〉

チャイコフスキー／交響曲 第4番

[料金] S ¥5,500 A ¥4,500 B ¥3,500 学生 ¥2,000

[お問い合わせ] ヨランダオフィス・チケットセンター 0570-033-337

フレッシュ名曲コンサート こもれびニューイヤー・コンサート

■ 1/7 (土) 15:00 保谷こもれびホール

指揮：大井剛史

ヴァイオリン：周防亮介

チャイコフスキー／歌劇〈エフゲニー・オネーギン〉より“ポロネーズ”
ヴァイオリン協奏曲

ベートーヴェン／交響曲 第7番

[料金] 一般 ¥3,600 高校生以下 ¥2,000

[お問い合わせ] 保谷こもれびホール 042-421-2323